

論文要旨 (【】内はキーワード)

福田景道「世代間コミュニケーションと歴史教育—歴史物語『梅松論』の継承と変容—」

歴史物語は、中世になると初学者を対象とする歴史教育、世代間歴史教育の教材としても享受された。その多くは、「枠物語 (Rahmenerzählung)」形式をもつが、その外枠部分に世代間格差が顕現し、世代間交流の実相も描出されている。また、『大鏡』『今鏡』『増鏡』などの主要作品では、外枠の世代区分が内側の歴史叙述部分の時代区分と連動して有効に機能している。

『梅松論』は、中世後期の歴史物語の小編であるが、完全な枠物語形式を保持して、正統な歴史物語の性格をもつ。一方、歴史叙述の対象年代である鎌倉時代(「先代」)を固定的に捉えて歴史意識が微弱である点、諸本間の異同が大きい点では先行の歴史物語と相違する。この特色に注目して、『梅松論』の序文の諸本間の変化を「先代様」の理解によって検証すると、京大本→天理本→流布本と推定書写年代が下るに従って、枠物語の外枠部分が、世代間格差を是正し、世代間教育に適するように変容していったことが明らかになる。ここに、世代間コミュニケーション、世代間歴史教育の一つの典型が見いだせると考えられる。

【世代、世代間格差、歴史教育、歴史物語、枠物語、大鏡、今鏡、増鏡、梅松論】

槇原茂「オーラル・ヒストリーと教育」

本論文では、世代間コミュニケーションとしてのオーラル・ヒストリーを対象に据えて、その定義と研究史を概観し、とくに口承文化の優勢であった民衆の歴史の掘り起こしに有用とされていることを確認した。そして、「大人と子供の関係史」(宮澤康人)の観点から、近代フランス農村の「夜の集い」の慣行における口承文化の伝統を紹介した。これらの点を踏まえて、アメリカやイギリスでおこなわれているオーラル・ヒストリー・プロジェクトには、新たに「大人と子供の関係」、子供や若者とコミュニティ(地域社会)の関係を創り出す機能もあることを指摘し、その学校教育への導入の可能性について検討した。

【オーラル・ヒストリー、教育、世代、地域、コミュニケーション】

新井知生「コミュニケーションの媒体としての現代美術

—近代の超克をめざす現代美術の在り方について—

本稿は「世代間コミュニケーションと教育」プロジェクト活動の一環として、2008年2月発表した「現代美術とコミュニケーション」を基に、

- ①近代と現代という時代間の相克や理念の変遷にスポットを当てる。
- ②現代美術の特質をコミュニケーションという観点から捉える。

という2点をキーポイントにして論じた。

近代美術の自律的、還元的な抽象美術の行き詰まりに対して、現代美術ではコンセプチュアル・アートによる「概念作用」を根本理念とした美術が生まれた。現代美術は「コンセプチュアル」な理念を持つことにより、自然や社会という他に対して開かれた関係を獲得し、近代の自我に閉ざされた美術理念を超克した。

また現代美術は絵画、彫刻等の伝統的な形式から離れ、インスタレーション等の新しい形式の美術を生んだ。それらは一個の自立した作品ではなく、「媒体」として制作者と鑑賞者との意識の交感を図るものであり、それは両者間のコミュニケーション装置として成立するものである。

【コンセプチュアル・アート、インスタレーション、現代美術、コミュニケーション】

正岡さち、飯塚智子「世代間コミュニケーションとしての家族の団らんに関する研究」

本研究では、家庭における世代間コミュニケーションという視点から、団らんとコミュニケーションの捉え方の違いを明らかにした上で、団らんの視点から望まれる団らん空間のあり方を検討を行った。その結果、下記の結果が得られた。

- (1) 平日の団らん合計時間の平均は2.0時間であった。
- (2) 団らん時の生活行為は、テレビなどを見る、話をする、たどの他に、私的行為から家事行為までかなり多岐にわたった行為があげられた。このことから、団らんにはそれぞれがそれぞれの「したいこと事」をしながら“ながら参加”をしている状況が伺えた。
- (3) 団らん観・コミュニケーション観を見ると、団らんの捉え方は以前に比べて広がってきており、コミュニケーションに近くなっていると推測された。団らんとコミュニケーションの違いは、団らんでは、家族の多くがそろふこと、行為の共有、場の共有であり、コミュニケーションでは、意思伝達があること、行為の共有が必要であると考えられた。
- (4) 団らん満足度やプライバシーの満足度は高く、団らんとプライバシーの満足度の間には相関関係が認められた。
- (5) 団らんではよい雰囲気家族が仲良く楽しむことによって相互理解を得ており、コミュニケーションでは会話などによる意思伝達により家族間の相互理解を得、その結果家族の絆を深めるという役割をしていると考えられた。
- (6) 団らん空間に対して、食事空間、キッチン、個室とのつながりが求められており、特に子どもの年齢が低い程その傾向が強かった。

以上のことから、家族の交流を望んでいる人の割合は高く、家事行為や私的行為をしながら団らんに参加している状況が伺えた。家族の交流を重視した間取りが望ましいと考える人の割合は高いことから、今後は住宅全体がより開放的な計画になり、団らん空間の機能の多様性が広がっていくのではないかと考えられる。そのため、個室と団らん空間をいかに関連づけ、家族の気配がわかる間取りを検討していくかが課題となるとであろう。

【家族、コミュニケーション、団らん、居間】

山崎亮「宗教民俗とコミュニケーション」

—講演「日本の神々：出雲地方の神話と祭礼」をめぐって—

小論では、まずⅠにおいて、私の講演「日本の神々：出雲地方の神話と祭礼」を再現し、「出雲神話」の概略を述べた上で、出雲地方の代表的な宗教民俗として、出雲大社の「神在祭」、美保神社の「青柴垣神事」、鳥根半島の小正月行事、松江市近郊の荒神祭祀を取り上げ、日本の神々に対する一般的な感覚を粗描した。これを受けてⅡにおいては、このような宗教民俗における伝統の継承という問題と、さらにこの講演がフランスの聴衆を対象とするものであることから、異文化間での宗教民俗の伝達という問題を取り上げ、コミュニケーションという観点から考察した。

【キーワード：宗教民俗、コミュニケーション、「出雲神話」、祭礼、伝統、異文化理解】